

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-151	15-105	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Midlife Alcohol Consumption and Risk of Dementia Over 43 Years of Follow-Up: A Population-Based Study From the Swedish Twin Registry. 43年追跡結果における中年期のアルコール消費量と認知症の危険について：スウェーデン地域住民双子登録研究		
執筆者		
Handing EP, Andel R, Kadlecova P, Gatz M, Pedersen NL.		
掲載誌		
J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 2015 Oct;70(10):1248-54. doi: 10.1093/gerona/glv038.		
キーワード	PMID	
疫学、認知症、危険因子、双子	25881581	
要 旨		
目的： 43年間渡る追跡によって中年期のアルコール消費量と認知症との関連を調べた。		
方法： スウェーデンの双子登録の中で、1907年から1925年に生まれ、1967年か1970年にアルコール消費量の調査に回答した12,336人がこの研究の参加者である。アルコールの分類は、1日当たりのエタノール量によって、0gが非飲酒者、1から5gが軽度、5から12gが適量、12から24gが重度、24g以上が過剰飲酒者とした。認知症の情報は国内の病人と死因登録から得た。解析にはCox比例ハザードモデルを用いた。双子の分析には条件付きロジスティック回帰分析と変量効果の解析を行った。		
結果： 認知症発症に関して、非飲酒者と軽度飲酒者に違いは見られなかった。重度及び過剰飲酒者は認知症を発症する危険度はハザード比がそれぞれ1.10倍(p=.028)と1.18倍(p=.033)と有意に高くなった。蒸留酒による飲酒は認知症の危険を高め、一方、ワインによる飲酒は認知症の危険を低下させた。軽度飲酒者に比べて、それ以上飲酒するものは、認知症の危険が57%増加し(p=.006)、認知症を発症するまでの時間が4.76年早くなること(p=.019)が示された。		
結論： 1日12g以上のアルコールを摂取すると認知症になる危険性が高まる可能性が明らかになった。特に蒸留酒を飲むことは認知症の危険を増加させる。これらアルコール量と認知症の危険の関連は、遺伝子や家族的環境因子では説明できない。アルコール摂取量を減らすことは集団介入をする上で役立つ戦略であると考えられる。		